

報



會

會 岳 山 本 日

105

月 五 年 六 十 和 昭

山 ス キー

堀 岡 清

うんざりする程澤山ある教科書の作つたものか、そこらの講習會の産物か知らないが、テレマークの出来損ひみたいな妙なテムボオ技術と稱するものが、しきりに流行つてゐるが、これは獨佛二流を混合して似て非なる、とんでもないものが、でつち上げられたんではないかと云ふ様な気がするのである。獨逸流とはラインル、ドウシヤ共著の「今日のスキー」、佛蘭西流とはアレー「スキー・フラシエ」である。こんな事はどうでも良いことかも知れない、そして又數年以前迄はどうでも良かったのであるが、我が山岳會の偉い人達が冬山の講師としてスキー大衆或ひは實業登山團體の指導者養成に乗り出した今日、そして又岳聯と云ふものが誕生し、そう云ふ機會が自然多くなつて行くであらう現在に於ては、上述の問題がどうでも良い事とは思はれないのである。

るにつれて、山黨の金城湯池としてゐた此の領域も幸か不幸か無慙に滑り荒されてしまつた。前記獨佛の如きその最たるものである。獨逸流は捻りなし遠心力廻轉、佛蘭西流はスキー後部振り落し捻り廻轉たる平行クリステリアニアを主體とするものであるが、何れも鋭い前傾、そして獨逸流ではこれに加へて外傾が必要とされてゐる。紹介批評はやらないが、兩方共この最高の技術が競技用ばかりではなくして、ツアーに、高山に、誰にでもしかも重い荷を背負つても使用し得る技術であると主張しその爲めにはかういふ教授法を採用すべきだと、教へ方といふ事を強調してゐるのである。

我國ではスキー聯盟が競技用スキー以外に一般大衆の指導に乗り出し、講習會を時に開いたり又「一般スキー術要項」といふ教科書まで發表してゐる。勿論これには缺點もあるが、衆智を凝めて一應指導法を確立してゐることは、無きに優るものとして、その努力は買はねばならぬであらう。

昨今の冬山講習會と云つても、教へることはアイゼンやピッケルで歩くことではなくして、スキーで歩くことがその殆ど全部である限り、唯一緒にスキーを穿いて歩く丈では講師として不親切である。

一緒に山を歩いてゐてぶつかる色々のいやな條件の下で、かういふ場合はかうだ、かういふ時はかう滑るのだと實地に指導を與へる事こそ、後人を作り上げる先人の眞の務であらう。スケート場の様なゲレンデでスキーをやらせて置いて冬山もないものだと思う。スキーの講習をやるなら、先づ第一に講師の方で、教へるべき山スキー術——勿論新しい意味の——を作り上げることこそ肝要であらう。山スキーと云つてもスキーである以上競技用スキーと本質的に異なるものではないから、これはスキー聯盟邊りに任せて置いてよろしいといふ論も一應は成り立つであらうが、スキー聯盟は矢張り競技的であり、山的な行き方ではない、山岳會が眞に第一線に在る人々の集りなら、今こそ、その全能力を擧げて大衆指導の方法を作り上げ、それを持つて教へに行く事こそ良心的といふべきである。纏つた教授法は勿論の事、各講師間に連絡さへない様なだらしない講習會ならやめなうがまだだから我が山岳會の偉い人々もそういふ會には出て行かぬ方がよからう。生徒が低調だといふなら、それなりに又教へ方があらう。兎に角出て行くからには教へるものを持つて行く必要があらう。

我が山岳會でかういふ講習會を主催するのではないから、そんな必要さらになしと言ふのならばそれ迄であるが、大衆指導と云ふ事が放つて置けない時となつては、山岳會でかういふ問題を探り上げて決して無駄ではないと思ふ。自

目 次

- ・ 山スキー……堀岡 清……一
- ・ 北鮮の山にて……二
- ・ 關根 吉郎……二
- ・ 鹿澤の山名について……三
- ・ 中村 謙……三
- ・ 老探險家の死を悼む……三
- ・ 東 良三……四
- ・ 四月の十勝岳……四
- ・ 富田 健一……四
- ・ 小谷温泉から笹倉温泉へ……六
- ・ 田邊 主計……六
- ・ 仙臺市に於けるジョン・モリス氏の講演を聞く……七
- ・ 佐々木 佐太郎……八
- ・ 本會の新事業について……九
- ・ 本年度會費納入の現状とお願ひ……一〇
- ・ 今度の「高山深谷」……一一
- ・ 圖書紹介……一二
- ・ 會員通信……一三
- ・ 會務報告……一四
- ・ 會計報告……一六

分では何とせよ、人の仕事の揚足取りをやつてゐる時代ではなからう。教科書的でない、より親しみのある、より親切な山スキー術を作り上げる事こそ、與へられた問題であり、そして又それを作り

上げる事こそ、獨り大衆の爲めのみでなく、作人自身の爲めでもあり、やがて山黨はスキーが下手だといふ悪評を一掃し得る力となるであらう。

六年振りに關東へ戻つて來て見て、表面の恰好は進んだが、内容は昔とちつともかはりが無いスキー振りを拜見し、山を下つて來た餘勢を驅つて、冬山のシーズンも終りかけた今、盲目蛇的にこんな事を書いてみた。此の會報上でスキー技術の論議が戦はされ、又諸々の教科書に對する優れた批評の讀まれる日の來るのを待つてゐるのは、獨り私のみではないであらう。

(一九四一・三)



北の山のてに

關根吉郎

眼が醒めてしまふと、足の先の痛むのが氣になつてもうどうして

も眠ることは出来なかつた。體を曲げて足先を手袋で押へてみても寒さは骨の髓から込み出して來るかのやうに背筋を走つた。體を傳つて隣の寝袋の中から肩が響いて來る、同じ寝袋の中でもこちらは眠れずに苦しんでゐるのに、この苦痛も知らずぐつすり眠り込んでゐるのかと思ふと、知らず知らず腹立しくなつて來て、ぐー／＼響く毎に腹立しきは益々かき立てられてゐるやうに感じた。

やあ、三十五度だ。おい、もう夜が明けてるぞ、早く起きろ、と呶鳴る聲が天幕の外でした。寒いなあ。少しも眠れなかつた。寝袋の中からぼつぼつとそれに答へる聲がする。暫くしてから炊事の係は起きて行つたやうである。三十五度と聞き、もう陽が當つてゐると知ると幾分樂な氣持になれて暗いところで思ひに耽つた。

寒いと云つて第一に憶ひ出されるのは、何と云つてもこの前同じ冠帽峯に來た時のことだ。今年は此處迄來る間に例年より大部暖かですといふ事を何度も聞いたが、四年前に來た時も例年より餘程暖かい年だと云ふ事であつた。それ以前に、京大の白頭山の時も例年よりは暖かい年だつたと云ふことがその紀行中であつたやうに思ふ。内地からの御客さんに對して、北鮮の人々は必ず例年よりは暖かですと挨拶して慰めるつもりなのかも知れない。或ひは反對に本當はもと寒いのだぞと驚かしてゐる氣持なのかも知れない。實際我々が出かける年が擇りに擇つて暖かい年なのかも知れない。部に入つてから雪の上高地に續けて出かけたが、積雪期の穂高の天候も今迄平年並と思つた事は一度もなかつた。雪が降れば天氣の悪い年だと云ひ、晴れば晴れたで黙つて登らずに、こんなよい天氣では氣味が悪いと言つた。さう云へば東京で聞く氣象通報も平年より何度高い、何度低いと變調の時の方が多くて、平年並は稀にしかないのではないだらうか。極く正確な科學的基礎の上に立つ記録でもこの通りなら、人並外れて等と言はれても何も氣にすることはあるまい。寝袋の中が温くなつて來たのであらぬ方向に考へが展つたが、その暖かつた筈のこの前の冠帽峯の時も、實に寒いと感じた日が幾日も續いたのであつた。

計畫が進んで私のある隊が雲嶺を越した第四キャンプに入り、翌日西冠帽峰に登ると云ふ日には、白い三人用の小さな天幕の中で寝る迄が／＼と震へてゐた。其翌日の登頂の日には更に厳しくなつて快晴であつたにも拘らず謎に氷柱が下つた。撤收に移つてからも寒い日ばかりであつた。机上峯の第三キャンプを引き拂ふ時も、細々とした道具を片付けてゐる間に手足の感覚が無くなり、鼻の先や頬は白蠟のやうに變つた。毛皮の手袋で顔をごし／＼擦り乍ら、ほう／＼の態で逃げ下つた。マットは鐵板の様に凍り、叩くと金屬的の音をたてた。第二キャンプに下り、ベースキャンプと無電の連絡をとる爲に小林さんと二人で残つた時も續く三寒が怨めしく、一日も早くオンドルに辿り着きたかつた。防寒の正装をして寝袋に半身を入れ、焔爐をあるだけ點けて、手袋のまゝスキーを叩いたが、次第に指の先が痺れて來て一人で五分と續けて打てなかつた。第一次の想ひ出は同じ寒さに晒されると昨日の出來事の様に新しく甦つて來た。

飯の用意が出来たと云ふ知らせに寝袋を出ると射す様な空氣を感じた。寝袋の入口も天幕の内側も白く凍り付いてゐる。天幕を出ると山の蔭からもう太陽が出かかつてゐた。既に十時を過ぎてゐたが、張り綱につるしてある寒暖計はまだ三十度に近い赤い線を止めてゐた。此處ベースキャンプを設けた地點は太雲谷と云ふ地名があるさうだが、こんな地名は今迄に誰も用ゐたことはない。天幕から百

惑してしまつた。今朝は確かに動きが鈍かつた。隊員の顔には疲労の色が明らかに現はれてゐた。

我々の平素の山行きは、晩東京を發つて翌朝はもう山に近付いてゐるのが普通である。一日海に揺られ、汽車に三晩を過し、延社から發煙洞と休ない忙しい旅を思へばこの疲れも亦當然であらう。今日一日は此處で休養すべきだと思つた。

残つてゐた裝備食料の整理を終ると、各自天幕に入り、燐燐の周圍を圍んだ。出たばかりの太陽はもう山の蔭に沈みさうである。延社は寒かつたが、此處に着いた日も昨日も暖かつた。どうしてかう氣候が急變するのだらう。こんなところから話が持つて行つた。山日記を見てゐる者が、今日は大晦日のなあと珍らしさうに喋り出した。東京を發つてからまだ一週間ちやないか、もうずつと昔のやうな氣がするな。よく眠れなかつたからかも知れない。牡丹江行きの汽車はまつたく我慢出来なかつたなあ、臭くて騒々しくて、俺の側にゐた奴は通路で子供に大便をさせやがつた。汚いといふ感念が異ふんだね、それよりなにしろ暑かつたやないか、汗が流れ出したんだから勿體ない話だよ、今日はどうしてかう寒いのか。

話は今日の寒さに戻つた。これから先登つて行つたらどれだけ下るだらう、どこ迄下るか記録を作つて歸らう。五十度迄測定出来る寒暖計を握つて、勝手に自分で氣温を支配出来るやうな事を云つても、先の樂しみとは聞えなかつた。若し本當にこれから先、登るにつれて氣温が下つて行つたら。

昨日は幸ひそれ程寒くなかつたので、この延面水を四軒程溯つて第一キャンプを建設した。然し目指す雪の山等はどこにも見えず、先の見通しもつかなくなつた。その上運搬中石油罐が破損して、安達が石油を浴び體がかぶれてしまひ、今日磯邊と發煙洞に下つて行つた燐燐は天幕の中央で青い短い焰を揃えて靜かに燃えてゐるが、明日からの漠然たる未來を考へると私の胸は早くも不安に襲はれ始めた。

鹿澤の山名について

中村 謙

紅葉館の帳場で炬燵にあたり乍ら例の龜藏さんと四方山の話を語り合ふうちに、鹿澤の山の名稱について色々な話が出た。勿論歸つてからも忙しいので未だ充分に研究もして見ないのだが、今まで聞き及んでゐたのと多少違ふ點もあり、或ひは未解決のまゝでゐた疑

點の解決されたのもあつて、自分には少なからず参考になつたと思ふので、左に一筆認めて見ようと思へる。

横 笹 小諸峠(車坂)を越した高峰山の東北斜面、則ち閣澤の上流で、天狗ヒュッテのある附近一帯を、上州では「横笹」、信州では「ツブガ平」といふ。

ヨオの尾 龍ノ塔山の東に聳える二千二百米の峰に關しては從來種々の名前があつた。曰く「カメの尾」(山溪四二號、小林勇)、曰く「横笹山」(山溪三六號、馬場忠三郎)、曰く「水ノ登山」(山小屋六四號、横澤末木)、曰く「ヨオの尾」(アカザレ)(山小屋三七號中村敬)。ところが龜藏氏の語るところに依れば、自分が獵師から聞いた名稱は「ヨオの尾」が本當だそうで「カメの尾」といふのは龜藏さんが、「あれは自分の尾っぽ見たいなところだ」といふ意味で、冗談半分にお客さんに話したそれが一部に恰も本當の名のやうに傳はつたのだといふ。横笹山とは、横笹の上にある峰なるが故に斯くは稱へる人もあり得ることゝ思ふ。又「水ノ登山」なる名稱は新鹿澤の宮崎勝君に云はせれば、確にそういふ人があるといふが、龜藏さんの意見では、「水ノ登山」といふのは黒斑山の別名で、前者

は信州側、後者は上州側の呼稱だといふ。尙「アカザレ」と稱するは、龍ノ塔山とヨオの尾とを結ぶ山稜の南側の斷崖を稱するのだてうだ。だから「アカザレ」が則ちヨオの尾ではなく、云はゞ「アカザレの頭」と云ふのが妥當であらう。

龍ノ登山 は色々考へ方もあるやうだが、三角點のある峰を「東龍ノ塔」、その西北に聳える峰を「西龍ノ塔」と稱して、ヨオの尾は龍ノ塔山の一部に隸屬せしめな

い方がよいやうに思はれる。

ウスコバ 地蔵峠から烏帽子岳へ通する夏路を少許り進んだ窪地を「ウスコバ」と稱する由。恰も白のやうに窪んだところだから、斯くは名付けたものらしい。龜藏さんは、馬の調練所にもつて來いの土地だと云つてゐるが、私には夏も冬も一種の魅力をもつて牽きつけるところである。

狐 平 湯ノ丸牧場小屋の附近に瀉ノ細流の上部に凹地を示した矢印を見るであらう。曾て其處へ狐が巢を作つて繁殖しかゝつたのを見付けた獲師たちは、得たり賢しとばかりに、之れを捕獲しようとしてたので、龜藏さんは不憫に思ひ、一策を案じて此處に稻荷様を勧請して、附近を「狐平」と稱へ、精神的に獵師の發砲を牽制したといふ逸話が残つてゐる。

湯ノ丸峠 湯ノ丸山と角間山との鞍部は、舊鹿澤から角間へ抜ける峠であるから、「角間峠」と呼ばれてゐるが、反對に角間の方から云はせれば、「鹿澤峠」とか「山の湯峠」とか呼べることになるであらうが、後者の二つはいづれも前者よりは、何んとなき温みのある名稱である。だが、それにも増して、こゝに潤のある名稱は「湯ノ丸峠」である。これは元祿年間まで實際に使用せられた名稱で、古い記録にも残つてゐる名前であるから、之れを復活させることも強ち悪くはあるまい。

大槍・小槍 小在池川のツマリに大槍・小槍と稱する岩の小さな隆起がある。昔からある名前かと思つたら、そうではなく、これも龜藏さんが、「ありや、まるで大槍・小槍のやうだな」と云つたのが、いつの間にか、斯くは稱へられるに至つたのだといふ。

和熊山 地圖に「奥和熊山」と認めてある一六二七米の峰は、上州では大塚澤のツマリにあるので、「大塚山」と云ひ、信州では和熊谷のツマリにあるので、これを「和熊山」と稱する由。その西南にある一七八〇米の峰は、和熊山の奥に聳えるので、之れを「奥和熊山」と名付けたのも、これ亦龜藏さんが名付けの親だとか。

老探險家の死を悼む

ドクトル・クツクのこと

東 良 三

私が昨年の秋、北米大陸への旅に出かける少し前に手許に届いた『紐育タイムス』に、往年山岳家として南北極探險家として、聲名を馳せたことのあるドクトル・フレデリック・ユー・クツクが、ラーチモントといふ北米紐育州の田舎で、淋しく数奇極まる七十五年の生涯の幕を閉じたことを報じてあるのを發見して、この老探險家の生前に知遇を得てゐた私は、一方ならず悲痛の念に打たれたのであつたが、先達つて紐育に立寄つた時にその墓地を訪ねて彼の暗い傷ましい辛苦の生涯に私の心からなる悼意を捧げることが出来た。

不名譽極まる罵詈訾の冷たい咎を受けて、誠に佻しい後半生を送らねばならなかつた不遇の人であつた。

一九〇九年の九月、長い北極圏跋扈の旅から本國アメリカへの歸途、デンマルクのコペンハーゲンに、よぼ／＼となつた小さな探險船を寄せて、初めて北極發見の第一聲を放つた時には、全世界は彼の勇猛心と名譽を稱へて、彼が多年の艱苦も漸く酬ひられたかの觀があつたが、それも東の間であつた。と言ふのは、それから僅か数日の後に、彼が永年の僚友アドミラル・ロバート・ペリーが加奈陀大陸の東北端ラブラドル半島のインディアン灣から、突如として同じ北極發見を公表したからであつた。

さあそうすると北極發見の名譽を上げたこの二人を生むだ地元のアメリカは勿論のこと、全世界の關心は一齊に、クツクか、ペリーか、何れが先に北極に到達したかといふ問題に集中されて、兩者のフキルド・ノートは學者専門

家達の研究探索の俎上に曝されることになつた。

然し凡ての形勢はペリーに幸して、クツクに非であつた。ペリーの探險隊は海軍省やナショナル地理學協會のみならず、有力な紐育タイムス新聞の後援があつたに反して、クツクのそれは僅かに數名の有志家の援助の下に決行された、言はず單なるプライベート・エンタプライズに過ぎなかつたからで、ペリーの後援者達は躍起となつて彼の名譽と信用を證據立てる爲に、凡ゆる手段方法を以つてクツク隊の缺陷と粗漏とを指摘して、その發見の根據無きことを暴露するに努めたのであつた。

結局權力の前に無力者は屈するの外無かつた。クツクが一九〇六年に登攀した北米最高峰マツキンレー踏破までも信するに足らずとして無視される運命に陥つて、彼が百千の證言も辯明もたゞ嘲笑に附されて顧られなくなり、終に人名辭典にさえも「詐欺探險家」といふ不名譽なる烙印を捺され、彼は光榮の山嶺から失意の谷底に墮落されて、其後の彼の半生は暗澹たるものであつた。意地惡の運命の魔手は、嘗て眞摯にして勇敢なりしこの自然探求者を不遇から絶望へと押込めて行つて、一九二五年彼がテキサス州の油田事業に關係

富田健一

昨年の大雪山に續いて今年も十勝へやつて來た。昨年こちらへも廻る筈だつたのを愛山溪で週日餘の吹雪と罐詰料理に悩まされた爲め、縁なき山山と諦めて山と別れたのであるが、又かうして出かけて來られたのも何かの縁があるのであらう。

四日に大阪を發つた。雪の少い内地は四月でもあるせいか青森平野にすら雪はなく、白一色の雪原であつた如くはも早や馬に引かせた楊繰る農夫は見えず、モンベ姿

四月の

十勝岳

の乙女達が語らひつゝ野路を遠く出かける姿が望まれ、ここにも春の近きがうかがはれた。それでも津輕の海を渡つてゐる内に身内はそろ／＼寒さを感じて來た。眞冬

でもそうであるが、この海峡を越すと越さぬで寒さの度合がぐつと變るやうだ。大阪を出る時は十七八度もあつて羽織は勿論冬シャツでは汗さへ出た程なのに、函館では粉雪が風に舞ひ散りオーバーにマスク、利休下駄の女達は裾をおさへて足早に歩を運んでゐた。長

萬部から倶知安へとニセコの麓を廻る邊りはまだすつかり雪に埋もれ札幌の町では雪が消えてゐたが翌朝山形屋で目覺めてみると約三寸程積つてゐた。今度は十勝をうま／＼すませば日歸り出来る山二つチトカニウシとニセイカウシユベそれに渡樺の手配もして來たので色んな用をして二泊、七日晝の急行で上富良野に向つた。煙突を大小五六本もつけた列車に旭川で乗換ふ。各客車のストープから出る煙りが雪の上をうつつて子供の繪本のやうだ。午後晴れて來た十勝連峰に西日が美しく照り映ゆ。何故か昨年のやうに焼けつく心もて眺められず突然見とれてゐる内に上富良野着、山好きな藤澤驛長からコースの説明をきいたりして宿伊勢屋に入る。夕食後ふらりと驛長さんが來て十時頃迄ストープの火をかき／＼山の話をし、今夜は一寸シワレますねといつて歸つて行つた。

八日、曇り、十勝一帯雲をまとひ中の茶屋からは雪となる。午後からでもどこかに登るべく重いリュックを馬橋一臺に頼んで上つて來たが雪は益々密度を増し失意の登山者に冷くあたると。雪の曠野を行く旅人を佻しく思ひ浮べ乍ら辰野隆の「忘れ得ぬ人々」を寒々と讀んでゐると、カーブで馬子共々

したことが圖らずも郵便條令に抵触することとなり、不幸カンサス州リビンウオースで五年の間、固圀の人となるまでに立到つたのである。その時にはもう彼も六十歳になつてゐた。

だが、全世界はこの悲運の人を見捨てはしなかつたのだ。彼に對して限り無き同情を寄せる特志の人が續々と現はれて絶えず獄舎の彼を慰めたが、其中でも青年時代に彼と共に白耳義探險隊に参加して數年の同南極圏で勞苦を共にした舊友、かの南極発見の勇者キャプテン・ロアルド・アムンゼン氏が、一九二六年の夏飛行船による北極飛行を敢行してアラスカから諸威に歸る途中に、わざわざ彼を訪ねたことがどれだけこの人を力附け感激させたことか。

それ計りで無く、アムンゼン氏はクックの北極記録の價值が、ペーリーにそれと比較して何等遜色の無いことを一々立證して、舊友の名譽恢復を圖らうとしたのであつたが、クックにとつて何たる不仕合せな事か、この當のアムンゼン氏其人は、其後間も無く伊太利のノービレ一行の遭難を救助に出かけたまゝ、北極の水原で行衛不明となつて仕舞つたことは、日本人々もよく記憶して居られるであらう。私がクック氏をカンサス州

獄舎に訪ねて、初めて知遇を得ることになつたのも實はアムンゼン氏の紹介によつたのであつた。彼が思いがけなく日本人である私の慰問を受けてどれだけ喜んで哭れたか知れなかつた。

二度目に會つたのは一九三〇年三月二十一日。彼が特赦を受けてシカゴに出て來た時の事で、私が一東の花と、それから彼の北極発見が問題になつた當時シヤトル・タイムス記者が、其頃北極通として米人間に博く知られた居た和田重次郎といふアラスカ跋躰家の意見を徴した時に、和田がクックに極めて有利な證言をした新聞記事のコピーを携えて、グレート・ノーザンといふ古いホテルの部屋を訪ねた私の双手を固く握りしめて彼は涙をさえ見せて私の訪問を感謝された。そして私達は食事を共にして別れたが、その時に紀念として、彼が一九一一年に刊行した『マイ・アツテンメント・オブ・ザ・ボール』といふ大型版の自著のフロント・ページに『親愛なる友情の魂を籠めて、東良三君に呈す』と認めて惠與されたが、この書中にはペーリーとの抗争の實情や、マッキンレー山踏破の眞實なることを切實に述べて居るので、いまでもこの本は私の書齋の珍書の一つとして愛蔵して居る。當時彼は

六十五歳の老齡であつたが、囚後の人とも見え、まだ五十幾歳位の若さと意力を示して居た。

私はそれ以來この老探險家と相見の機會を得なかつたが、其後一度テキサス州の閑居から受けた書面によると、すっかり過去の不快な記憶を清算して條々自適の生活を送つて居るとあつたので、私から英文で書かれた數冊の日本文化紹介の書物を彼に贈つたきりで爾來書として消息を聞かなかつた。私はクック氏が實際北極に到達したかどうかを判斷するだけの智識も持たないし、またそんなことを詮索する必要も認めない。世の中には案外な噂はせ物でありながら不當な名譽を盗んで、大きな額をしてうまく世渡りして居る例がどれだけあるか知れないのだ。少年の頃から山を好み、自然を愛して堅忍不拔、艱難辛苦の限りを嘗めながらも、その半生は登山と極地探險に捧げ盡して而も報ひらるること無く淋しくこの世を去つた老探險家ドクトル・クックを痛ましくも思ひ、懐かしくも思ふのである。

(一六三・一五)

會報原稿募集 締切毎月五日

箱から放り出されてしまつた。馬槽に乗つた事は二度、それも屋根のついた箱型だつたので實は馬の歩みを今日程じつくりみた事がなく後趾の運び具合や馬子の位置や懸け解のある時ない時の速度の相違を観察しつつ、馬といふ動物も却々頭を働かすんだなと感心してゐたのにとろろ雪の上に轉されてしまつたのである。笑ひ乍ら橋を起して又雪の下をゆられて行く。温泉にスキー客は會員藤野氏(法政山岳部員)一人。午後益々吹き荒れる。北海道に春は未だし。

上富良野(七・二〇)中の茶屋(九・三〇)一〇・一〇吹上温泉(正午)

九日、曇つてゐたが降雪なく風もないので十勝に向ふ。下山する藤野氏と泥流スロープで別れ、噴煙が白雲と混じて少し薄黒くなつてゐる空を目當てに前十勝東の澤を一人上る。途中時々小雪、後をふりかへりシュブールの判斷出来る間は登る事に決め澤をつめて噴煙に出た。時々薄ら日がさしかけるが空は依然雲多く四方共青空になりそうに見えない。この頃温度がうんと上り澤上部ではプラス十度の太陽の周りに寺田氏の忠別岳の雪穴生活(會報百號)にもあるやう大きな笠がかゝつてゐたの

で、又ふり出す前兆かと思ひ乍ら寒暖計に安心して登行を續ける。前日四五寸の降雪が高温で重くなり思はぬラッセルに苦勞する。大雪山で味つた粉雪を懐しみつゝ前十勝を過ぎると風成雪。やがて松が見える頃ガスがかゝり暫し見えてゐた主峰も消えて噴煙邊りもわからなくなつた。上ホロの方から吹く軟風に雪が混つてくる。温度から考へて降らぬだらうと思つたが降れば泥流のシュブール消失は確かなので主峰下のコブから引返す。夜に至つて物凄く暗れたが矢張り太陽の笠は降る前兆だつた夜中より物凄く荒れ始めた。泥流スロープ迄下りてくると白銀莊に宿泊中の石一郎氏夫人に會ひ「お休みなつてから振子澤へでもお出かけなさいませんか」とすゝめられ山莊で石氏に挨拶、色んな話の間に加納一郎氏の噂も出て「馬槽でもよいから久振りに吹上迄上りたい」といつてられた由何ひいつかルームでお會ひした時はよく肥え血色も好くなつて居られたのだから、もう氣晴しにこの邊迄來られても大丈夫でないかと北海道冬山の開拓者の長い療養生活を偲び實にお氣の毒に思つた。四時前より三人でナマコ尾根を上りつめ氣温の下りて少し滑りの出た尾根筋を眞直ぐ飛ばして歸る。

温泉(八・二)噴煙(一一・〇)
 ○前十勝(〇・〇)コブ(一・〇)
 ○白銀莊(二・〇)―三・四五)
 ナマコ尾根(五・一五) 白銀莊
 (五・三五―五・五〇)温泉(六・〇〇)

十日、夜中三時頃から風が唸り出す。夜が明けても雪風、あられと滅茶滅茶なので久振りに静かな室でごろりと横になり山と宿命に就いて考へたりする、午後になつて風益々強く吹きすさぶ。山便り

圖書室 開室時間

月水金 正午―午後八時
 火木土 正午―午後五時

日曜、祭日 閉室

精々御來室の程希望いたします。

を書く氣にもならず唯逆流するストーブの煙の始末と薪木の消えないやうにと一人苦勞するのみ。夕方石氏來訪。一時間程話して歸る。十一日、富良野岳か三段山の豫定だったが今日も亦雪。十二、三日に下山し、十四日小樽發の樺太西岸行の船の切符が買ひ得てあればチトカニ、ニセイカウシユベは又の事にして樺太へ行き月末歸阪の豫定です。



田邊主計

三月中旬に當會員の藤島、盛岡兩氏と共に出かけた御岳では天氣が悪くなつた爲にその中腹から引かへしてしまつたのであつたが、豫定通りに出来なかつたことを残念に思つてゐるだらうと察してゐた、又彼自身も残念に思つてゐるらしい細野の山案内人に、我々は、却つて、山は心をあとに残すところがいいと言つたのであつた私は四月初又出かけられそうだったので、スキイも細野に預けて歸つたが、幸にして二日の夜たつ事が出来た。今度は一人。三日、同じ案内人と四谷で一しよになり小

小谷温泉から笹倉温泉へ

谷温泉へ向つた。快晴。

四月四日(晴、夕刻より崩れる)。朝八時前に出發。中海澤を金山へ向つて登る。澤は思つたよりも廣かつたが、相當急な上に荷もあるので暇どる。兩側からは盛んに雪塊が落ちてゐる。雪がおちついてゐない時に此の澤を登ることは(殊に降りることは)避けた方がよいと思ふ。澤を登りつめた時は既に十二時半。雨師山が立派に見える。そこから金山の頂上まで意外に遠く着いた時は四時に近かつた。空は暗くなり風も出て來た。ツガの木の間には天幕を張ることにして、荷を置き、翌日降りる途を見に行く。燒山へ續く尾根は可成下つてゐる。その先に燒山、それから火打、妙高と暗膳とした夕空の下に連つてゐた。夜は風の音と天幕にバラ／＼あたる雨だか雪だかの音に天候を氣遣ひながらやすんだ。

五日。霧が濃く更に悪くなるのか良くなつて来るのか解らなかつたが、とにかく出かける用意をしてゐるうちに所々靑空が現れ、又ときに陽の光さへもさす。燒山は見えない。見當をつけておいた尾根を滑降する(八時)。そのうち燒山が霧の中に姿を現した。笹ヶ峯の方からの夏路に合つてゐる所で十一時。霧は再び吹上げて来て頂上は見えなくなり火打に續く尾根は強風に曝されてゐるやうであつた。火打から高谷池へ降りて行くのを止めて悪くなつた場合に降りる豫定地にしてゐた笹倉温泉に向つて燒山の北側の大きな斜面を滑降して行つた。山の上方と里の方は霧の中にあつて山腹だけがあらゐる。降りて行くうちには段々見えて來るだらうと思つてゐたが、霧は益々濃く空澤山を右に見る地點あたりに來た頃には五十米先の木がぼんやり見える程度であつた地圖の地形にたよつて滑つて行くうちに右方に川音がきこゑ出したので九百米等高線あたりに來てゐるものと思つて進んで行くと急に木の茂つた高い崖の上に出た。下に川の音がするがのぞいても霧で見えない。降りる事も出来ないのて又崖に沿つて引かへす。しばらく行つて低くなり川岸へ出たが對岸がどうなつてゐるのか全然見えないから渡つていゝものかどうかも解らない。雨も降り出して來て既に三時。又戻つて川に沿つて行く、霧は益々深い。まるで手さぐりで歩いてゐるやうなものである此様なことをいくら續けてゐても仕様がなかつた考へ出す。もう温泉の近くに來てゐる事は解つてゐて

も、初めての道であるから確信が持てない。天幕を張る箇所を物色する。ちよつと手頃な岩が見付つたので、その蔭に張る事にして、焚火をはじめた。食事を作つて天幕に入つたが雨だか焚火かがつと強くなれば此の六〇〇呎の九重の天幕はしみ通つてしまふ事を氣にしながら寢袋に入る。

六日。霧は依然として深く、何も見えないことには變りはない。朝から動いてゐればどこか降り口は見付けられるだらうと出かけたが、そのうち磁針は南を指して來た。このまゝ進めば燒山へ戻つてしまふ。恐らく尾根の末端に達して川に沿つて廻つたものであらう雨が降り出してたが濃霧は絶対に動く様子を見せぬ。不貞腐れた女を聯想する。沈黙の戦術とばかりに、ムツと口を結び顔には梅干の種子のやうな皺を作つたが最後、入口を封じたサマエの如く、地球に根が生えたかのやうになるのである。かうなつたら、こちらも晴れるまで寢て暮すことにしやう、寢てゐれば腹の減り方も少ないといふ説を立て、先の岩へ引かへして、とにかく米を焚く用意をはじめた。この邊は木が少なく薪木を集めるにも時間がかかる。二時半になる。この時、霧が動いて、はじめて里の方がぼんやり見えて

来た。温泉の建物も見える。正しくわれへは温泉に向つて延びてゐる尾根の末端の高い所にゐたのであつた。眞直に行けば十分で行けるだらう。直ぐにも出かけた。気がしたが食事を作ることも必要である。第一、下から見れば解る事だらうと思ふが上からではど

む。有難い事には空が晴れてゐる星も見える。大いに冷へて来たから明日こそは晴れるだらうと希つて、寝る。

七日。五時起きて見るとお天気であるが、空が赤く、長もちはいやうである。新雪は五寸位積つてゐる。前日炊いた飯と水の張

社団法人 講演と映畫の會

★六月二十日(金)午後六時
★九段 軍人會館

一、講演 會長 木暮理太郎氏

一、講演 會員 柳田國男氏

一、映畫 「亞細亞大陸横斷旅行」 八卷

一、映畫 「富士山の地質」 二卷

パテ・ナタン社

こを降りていゝのか解らない。居る位置が解つたから降りるのは明日でもよいといふ事になつて又天幕を張る。再び何も見えなくなつて来た。食事をして煙草をのむと五時近くなる。寒いので寢袋に入る。一夜分寝ても未だ十二時である。半身を起して二人で煙草をの

つたオートミールののこりを食べて出かける。(アルコールは使ひ果した) 高所は更につもつたらしい焼山の黒々とした岩も雪に覆はれ火打の方は見違へるやうに白くなつた。要心をして地圖の夏路(二本ある内の上の方)を通つて行く事にして橋のある所よりもすつと

上の方で川を渡り對岸の斜面を横切つて行くうちに又濃霧が立ちこめて来た。對岸から見當を付けておいた地點を求めて滑降を續けて平地へ出た。田の中に立つて眺めると我々の滞在してゐた所からは眞すぐに温泉へ降りられる斜面がある。十一時過温泉に着。雪が良く天候が良ければ二時間もかゝらない筈の處を二晩がかりで來てゐる。とつくに東京へ歸つてゐた頃には、まだ雪の上で寝てゐたとは「笑止の至り」である。温泉に入り、充分におひる御飯を食べ濡れたものを爐邊で乾かす、この安心と満足とはいつものながらうれいことである。四時に出て音坂へ急ぐ。新雪の御かけて街道を音坂までスキイが使へた。音坂五時半の乗合自動車で北陸線の梶屋敷へ。七時前の汽車で東京へ歸る。細野へ歸る丸山鶴喜代君とは長野で別れた。次の機會には、笹倉温泉から火打へ登りたいと思ふ。

この日は一日天候は定まらず、音坂からも乗合自動車は大粒の雹の中を走つた。梶屋敷では冷雨の中に未だ當のかたい標の木が風に揺れてゐた。この邊は物淋しい風景の地である。夕暗の中に日本海の荒れて波音が高く、街道すじの店々に燈火のついてゐる所は少ない。菓子屋の店先には、かつて

は菓子類が入つてゐたと覺しい空の菓子ビンがならんでゐる。停車場の薄暗いあかりの待合室で私は懐中電燈の光で時間表や掲示板を讀んだ。

右のやうに非常に暇どつたが、普通荷が重くなく、雪の状態も悪くない場合左記のやうな時間で充分と思ふ。

小谷温泉—金山 約六時間半
金山—焼山 約二時間
焼山—笹倉温泉 約二時間半

一人で行く時には何か本を持つて行く、荷が軽い時にはリルケの「マルテの手記」(白水社)なんか持つて行つた事がある。この本の目方は百匁。今度は吳氏譯ギリシア抒情詩選(岩波文庫)を一冊持つて行つた。二十二匁。この小さい本が随分大きい樂しみを與へるその中のサツボオの嫁ぐ人を惜しむ歌や娘の戀ごころや獨居の乙女の姿を歌つたもの、ギリシア詞華集中の讀人不知の花せうびになり

たい、といふ歌や同じくソレアグロスの作といはれる歌など誠に美しい。これらはいづれも俗謡の體を具へてゐて殊に親しみを感ずる事實、解註によればこれらの中の或ものはレスボス其他の地方の民謡になつたものといふ事である。およそ詩集のよいことは、短い句

でさへ、何十年繰返し讀んでも倦きないことであらう。

エ・イ・ハウスマンの「シユロプシアの若者」もいゝ。リチャズ版はうちにのこしておいて、惜しげのないインタナショナル・ポケット・ライブラリイを持つて歩く。目方は十四匁。最初の方にある山櫻を見に行く詩なんかは二十數年にわたつて私の最も好むものである。もし私が銃殺をされるやうな場合、幸ひにして心にゆとり

圖書基金募集

本會圖書充實のため、會員諸氏より圖書基金を募集致したいと存じます。振つて御申込下さい。

●一口 金五圓也

があればこの詩を口吟むのではないかと思ふ程である。この詩集の中の數々の詩の極めて率直な表現と非妥協的に思はれる毅然たる精神とその底を流れる憂愁の美しさは蓋し近代詩の中で比類ないものではないかと考へるのである。難澁に當つてこれらの詩が一そう親しく感じられるのも、あるひは、それらの理由によるのかもしれない。



仙臺市に於ける ヨシモトス氏の講演を聞く

佐々木佐太郎

去る三月二十三日、

国際文化協會仙臺支部主催で、來朝中の會員ジョン・モリス氏の「エヴェレスト登攀隊に加はりて」といふ講演會があつた。モリス氏が公式の席上で、かゝる話をされることはおそろしく中央の東京に於ても餘りなかつたのではないかと思はれるし、且つ仙臺で山に關する話が聞かれるといふことは大變珍らしいことでもあるので、とるものもとよりあえず聴きに行つた次第である。その印象を二三御紹介したいと思ふ。

その日は來仙後得た山仲間、東北藥専山岳部員二名と、藏王機

梅坂のスノーホールから飛び出して時間一杯に仙山線を一踏脚仙の途についた。大きなルックとスキークを肩に、會場（齋藤報恩館）に着いた時は、既に二三百人の聴衆が集つてゐた。

最初東北帝大土居教授より、モリス氏の紹介を兼ね、エヴェレスト登攀に就いての簡単な歴史や、ヒマラヤの氣象、氷河、雪崩等に就いての解説があり、次いで六尺豊かのモリス氏は長い鞭を兩手に、ゆつくりと解り易いイングリッシュで英國のエヴェレスト登山に對する國家的意圖を述べ、更に幻燈を用ひて、ロンバック僧院迄の道順及ロンバック氷河より第六キャンプに至るスナップを一つ一つ原稿と照合して懇切に説明してくれた。

その各々に就いてその儘記述すれば、結局モリス氏のエッセイ記になつてしまふので、中で特に印象深かゝつたスペクトルを拾つてみると、先づダーズリン附近の上空より寫したらしい鳥瞰圖によりヒマラヤ及エッセイの概説があり、「險阻な最短距離を避けて谷間を通つて西藏入りをした」経路が情趣豊かに聞くものを魅了させ、特に、ダーズリンの人夫達の風俗は珍らしく、シェルバに關しては他の登山隊の人達も述べてゐる如

く、その人夫としての優秀さを口を極はめて力説された。一八〇頭のヤクの渡渉の光景は實に壯觀であつた。

切り立つた溪谷風景の中を進む遠征隊。今日尙行はれてゐるのかと驚かされる「ラマの風習」石造の「ラマ建築」又、古代支那の藝術に似たラマ藝術ともいふべき各種の民藝品、首都の「ラサ風景」等々東洋的なものを背景に近代的な隊員が見えるのも一入遠征的色彩を強めたやうに感じられた。

かうした記録的なものゝ外に、隊員が教へたボクシングを眞似てゐる西藏青年、その傍でレフエリーをして喜んでゐる隊員等、彼等の何時でも愉快さうな半面が偲ばれる。

ロンバック僧院では一行の遠征無事なれと嚴肅な祈禱が捧げられ、そして愈々遠征隊の本格的な攻撃隊形が整へられて聴衆を一段と緊張させてしまふ。数張かのテントの散在する「ベースキャンプ」で初めて「突撃隊全員の集ひ」が紹介された。一人一人に就いて、その懐しさうな思ひ出と役割の解説があつたが、最後にこの男が私であると言つて竹の鞭で示された姿は演者モリス氏の闘志に燃えたヒマラヤに於ける登山姿であつた。

CⅡのデイナータイムで水の沸點の話がされた。高度が高度だけにその差も大きく實感があつた。

CⅣの氷壁に架けられた繩梯子を登つて行く場面や、ノースコルに達してからの愈々胸のすくやうな數場面は、氏も思はず早口になり聴衆の耳も危し氣になつてくる。

酸素シリンドラーに就いての用法、效果、結果等丁寧な解説があつた後CⅤが現はれ、そして、かのマロリー、アーヴィン兩名の世界最高度に於ける悲劇の物語り、ガスの切目からオーデルの望見したドラマテイカルな二人の最後の影を追ふやうに燃ばんだ語調が數分間續いた。

永遠に山を追求して止まなかつた若き目差しのマロリーとアーヴィンのクローズアップにモリス氏はじつと見入つてゐる。しかし多くを語らなかつた。きつと當時の追憶に瞑想してゐたのであらう。

頂を指呼の間に見つめながら、退去せねばならなかつたエッセイ隊の悲壯な決意。そして再び踏む日のあるであらう前進基地に別れを告げて氷河を下つて行く隊員の姿。「ケルンの見えるベースキャンプ」から頂を示し「必勝を誓つて來たのだが」とモリス氏は言葉をつらんだ。聞きたつて私は、氏が來朝當時「エッセイは日本人の體力と

精神力によつて絶対に登攀の可能性がある」と言つたことを思ひ出し、何時の日この言葉を此の國の人が裏書してくれるであらうかと考えた。

小憩の後映畫に移つたが、フィルムが古い爲とモリス氏の説明がない爲か幻燈講演の印象は残らなかつた。

この會合を通じて感じたことは、欲を言へば限りがないけれども、主催者側がもつと山を知つてゐる人達であつたならといふことであつた。例へば日本山岳會のやうな會が主催してかゝる講演會が催されたら、随分しつくりとした氣持のいゝものであつたらう。しかし何れにしても、この夜ばかりは完全なヒマラヤ至上主義者になりきつて、春淺い藏王下ろしの風さへも感じないばかりに若い血を沸きたゝせて家路を辿つたのであつた。

御任所御變更
の場合には必ず
本會事務所宛
御一報下さい

本會の新事業について

本年初頭本會は厚生大臣から社團法人設立の許可を受け、今や大體その組織も整備して公益法人としての事業に邁進し得る立場に立つに至つた。併し、本會は形式上の組織こそ新になつたがそもゝ

三、登山施設ノ改善促進其ノ他登山者ノ爲適切ナル事業
等々その行ふべき事業については可成具體的な點迄述べてあるのであつて、本年度から實行に着手する新事業についてもそれを忠實に實行しやうとする迄であり、右の趣旨から別に飛躍してゐるものではないが、それにしても相當思ひ切つた躍進であり、この日の來る事を隱忍待望された會員諸氏に相當の期待を與へるであらう事は疑ひのない事と思ふ。

本年度から實行する新事業については、本號所載の會務報告にも明らかな通り左記のやうに行ふ事となつたが、本會は決してそれだけを以て満足してゐる譯ではなく、本會の力をもつてなし得、又なさればならぬ事があるならば、とんとん實行して行きたいと思ふ。會員各位の遠慮なき意見の申出を待つものである。次に新事業を列記して少しばかり説明して見たい。

イ、登山年譜(日本登山史)の編纂
この登山年譜は實は昨年來の懸案であり、僅少乍ら已にその一部を實行して來た積りであるが、本年からは當面の本會主要事業として數年若しくは十數年の繼續事業として組織的に立案研究し、その道の専門家である木暮會長を委員長とした委員制下に着實に實行して行く豫定である。しかし之は中々の難事業であり容易な事では完成出来ない事と思ふが、こんな事業は本會でなくては出来ない事業であり本會に課せられた一大使命と信するが故に敢て難を犯して完成を期す次第である。幸にも全國各地にその道の權威である會員を多數持つてゐるので、それ等の方々の絶大な支援を得て必づ成し遂げ得るものと信じ、近く具體的の計畫を發表する豫定であるから、その際は會員は元より會員以外の各地山岳會又は個人の熱意ある支援を切望するものである。

ロ、日本山岳會實の制定

本會が誕生してから已に三十七年、統制團體であつたらうとなかつたらうとにかく日本を代表する山岳團體であり乍ら今日迄こんなものなかつたのは實は不思議に思ふ位であるが、既往はとにかく愈々本年からはこの日本山岳會賞を制定し、登山界に大きな奇與のあつた個人又は團體に賞並に賞金を授與する事となつた。それは山岳又は登山についての研究文獻又は實際登山について授與するものであるが、本會としては左程の難事業ではなくそれである登山界に一つの活氣を與へる事も確實と信するから、この事業は多數會員に喜んで貰へるものと思ふ。

ハ、山岳圖書の刊行

定款第四條の「機關雜誌山岳其他圖書の刊行」を實行する迄で本會が急に本年から出版屋になつたといふ譯ではない。本會ならではなし得ないやうな圖書の刊行は次々と實行して行きたい。本年刊行の豫定のもの、既に刊行せんとしてゐるものは次の通りである。

一、山と戦争

支那事變が初つて既に滿四年、本會々員からも多數の出征者があり、已に歸還せられた會員も相當に多い。又名譽の戦死をされた方も四名ある事は已に會員名簿で御承知の事と思ふ。此處に改めて護國の英靈に感謝の誠を捧げる次第である。

野戰と登山とは色んな方面に於て共通點のある事は、我等のよく知る所であるが、従つて登山で鍛へた人が戦争に行けばどの位その經驗なり身體なりに役に立つものであるかも知言ふ迄もない事ではあるけれど、只今の所國民が全部登山の經驗が豊富である譯ではなく矢張り山と戦争との深い關係を知らない人が多いと思ふ。この際に

出征會員の尊い體驗を輯録して、山と戦争との密接な關係を廣く國民に特に青少年に知らしめる事は本會の義務であり、今こそ絶好の機會であると信じ刊行に着手する次第である。

二、登山技術書の刊行

今迄は個人の書いた登山技術書はあるけれど、信頼し得る權威のあるものが殆んどない、是非本會でさうしたものを編輯刊行せよとの聲が多いのでこれを實行する事にした。これは委員の選定等に相當の困難があつて具體的の發表は少し後れるかも知れないが、會員からも希望のある所を是非聞きたいものである。

三、高山深谷の刊行

高山深谷第十輯の刊行については已に全會員の承知せられる所であらう。現在已に優秀山岳寫眞七百餘點が集まり、編輯委員はその選別に苦しんでゐる次第で、刊行の日を期待されたいと思ふ。

二、所藏圖書の整理充實

本會圖書室の藏書は和洋書合せで四千冊に近く、本邦唯一の山岳圖書館である事は言ふ迄もないが、只今の所十分整理されてゐないので、これを整理して圖書目錄、圖書原簿を完成し、尙不足してゐる圖書は遂次補充して山岳圖書館としての完成を期し、目下圖書係

本會ハ山岳ニ關スル研究、知識ノ普及並ニ健全ナル登山ノ指導獎勵ヲ爲シ、會員相互ノ聯絡親睦ヲ圖ルト共ニ、山岳及登山ヲ通ジテ國民ノ心身鍛鍊並ニ自然愛護精神ノ昂揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス
とあり、第四條には
本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ
一、機關雜誌「山岳」其他圖書ノ刊行
二、登山ノ指導獎勵ニ必要ナル研究會、講演會、講習會等ノ開催

は整理に忙殺されてゐる事を報告したい。

ホ、講習會の開催

この事は關西支部とも十分打合せの上次回に報告する事とする。

ヘ、天幕その他登山用具の比較調査

特に天幕は各學校山岳部や各山岳會がそれ／＼各種のものを考究製作して實驗してはゐるが、何れも一長一短あつて中々理想的なものがないにも係らず之を綜合研究して結論を與へるといふ機關は今迄になかつた。特に物資少なく且節約の緊要な今日、標準型といふやうなものを制定して製作の單純化を圖る事は緊急を要する事と思はれるので敢てその勞を取らんとする次第である。之については特に各學校山岳部の支援を熱望する。他の登山用具に於て又然りである。

ト、雪洞の研究

最近雪洞生活の流行甚だしく、早くも數名の犠牲者を出すなど打棄て置けざる事態となるに至つたので、研究家を動員して結論を與へるべく努力する事とした。

チ、高山深谷刊行記念山岳寫眞展覽會の開催

右は大體七月開催の豫定であるが、編輯の都合によつて或は開催期は九月となるかも知れない。

リ、講演映畫會の開催

毎年二回講演並に山岳に關する映畫會を開催する事となり、本年は六月と十一月下旬に行ふ事となつた。

六月の會は本會の法人改組記念講演映畫會で、六月二十日九段下軍人會館で行ふ事と決定した。講師は柳田國男氏並に木暮會長で、柳田氏には目下交渉中である。映畫は、シトロエンのアジア大陸横斷旅行といふ高評あるものと富士山の地質を上映する事となつた。今回は有料であるが會員には無論招待券をお上げる。

右のやうな展覽會講演映畫會等の催しは残念乍ら目下の所東京附近の會員だけでは實際には參會出來ない實狀であるが、地方會員に對しては何等かの代るべき特典を考究中である。

役員會で決定した本年度の新事業は大體右の通りであるが、尙外に立案中のものに穂高岳其他主要高山に於ける登山地圖の作成が計畫されつゝある。

又「山岳」の内容が近頃は餘りに特殊なものに傾き過ぎて困るといふ聲が會員間に相當高いやうであるが、これは種々の事情上やむを得なかつた點もあるが、深く考慮して今後は多數會員の希望に應じたいと思ふ。それについては一

層多數會員諸氏の聲を聞きたいものである。又會報は大體一年十回程度で立前で發行して來たが、昨年六月以來未だ一月も休まず發行して來た努力は會員の了承される所と思ふが、尙今後は一層内容を充實して期待に沿ひたいと思ふ。

之も元より會員多數の支援なくては行ひ難く、多數の方々の寄稿を切望する次第である。尙山岳や會報の記事は或特殊な人が執筆し、それを讀むのが一般の會員であると思つてゐられる會員も相當あるやうであるが、それは無論飛んでもない思ひ違ひで、會の機關誌である山岳や會報に會員が執筆するに遠慮などあるべき筈のもではない。この點は當然の事乍ら特に強調して置きたい。

最後に、日本山岳會には旗印がない、旗印を確立せよと言つた人があるが、本會の旗印は本稿の最初に述べた定款第三條で明らかであるが、簡単に言へば、

山に登り

山を知り

山を愛し

山を守る

事ではなからうか。この最後の山を守るといふ點は今後は特に努力せねばならぬと信ずるものである。(塚本記)

本會員の「岳聯」加盟方法に就いて

日本山岳會は今更申す迄もなく日本山岳聯盟を支持するものでありますが、その機構上本會が一體となつて「岳聯」に加盟することは出来ないのでありまして、爲に本會としては再三役員總會を開き、會員の岳聯加盟方法につき検討を重ねて参りました。

右につき本會報別記會務報告にも記載しました通り、四月八日の役員總會に於て左の通り最後の決定をみましたので御通知いたします。

本會員は次の何れかの方法により加入せられたいと存じます。

- 一、職場その他の地域團體を通じて加入すること。
- 二、府縣毎に會員の團體を組織し、それを通じて加入すること。

以上

本年度會費納入の現狀とお願ひ

本年の二月下旬に會費の納入について御相談申上げました處、大多數の會員の賛同を得まして續々と御送金を受け、會計は感激の中に忙忙を極めました。その入金の状態をグラフに畫いて見ますと、一時急激な勢で直角に近く上昇し、極點に達するとその儘水平狀態を續け、それから徐々に富士の稜線狀に下降し裾野近くに達しますといふ傾向がゆるくなつて行きます。そして四月下旬に至つて最下線に達し或日の如きは一人の送金者もないといふ狀態に達しました。それならばその頃迄どの位の入金者があつたかと言ひますと、正に全會員數の五割餘りに達して居ります。後の四割何分の會員の方々はどうかう風に考へて居られますか、とにかく未だ御送金はございません。尤も今迄は「山岳」第一號發行以前にうつかりその年の會費を請求しますと、會員からきついお叱りを受けた事もあつたさうでして、「山岳」發行以前には會費の請求はすべからずといふ鐵則？があつたとか聞いて居ります。所でこの二月會費の御相談を申上げた頃は、山岳第一號の

発行はおろか、昨年度分の二號さへ、編輯者の出張、印刷所の多忙等の理由によつて未だお送りしてない頃でありましたが、誰一人抗議を申込んだ方がないばかりか、事實半数以上の方が黙つて或は會員は會費を収める事によつて會員道を實踐すると言つて、御送金下さいました。しかもその方々を仔細に調べて見ますと、昨年十一月以後になつて十五年度の會費を納めて居られ、それから三四ヶ月にして十六年度分を納めて居られる方が多数を占めて居たのには一驚した次第でありました。會計の實狀さへ會員に卒直にお傳へして御相談したならば、本會々員は決して會計を苦境に陥らせるやうな事はないのだといふ確信を只今會計係は持つてゐるのでありますが如何なものでしょうか。とにかく昨秋以來役員會に於ては一回も會費についての心配らしい相談をした事もないといふ事は、全く會員諸氏の會を思はれる衷情の現れとして會計子は感謝しないでは居られないのであります。厚く御禮を申し上げます。

それならば本年の會計は全く安泰な状態にあるかと申しますと、本年度は特殊な状況の爲に中々さうとも言へません。法人の成立、山岳聯盟の結成迄の全額援助等例

年に比し相當多額の經費を既に使つて來て居ります。三月迄の収入も例年に比し驚く程多くありましたが、支出の大きかつた事も亦一驚に値するものがあります。決して放漫政策ではなく事情やむを得なかつたのであります。今後の會の經營方針につきましては近く會からとくと會員諸氏に御相談申し上げる筈であります。とにかくまだ本年度會費をお納めにならない方は此際至急お納めを願ひたいと切望する次第であります。近く「山岳」第一號を發行致しますが、今度はその金に困つてお願ひするのではありませんが、本年は法人改組を機とし、會では相當目新しい事業を行はうとして居ります。その大體は上記の通りであります。それは恐らく全會員の希望のものであります。しかしそれを實行しますには金の入る豫想だけでは出来ない事情にあります。現實に金がなくては出来得ない事情にあるのであります。どうぞお察しを願ひまして全會員の御支援を熱望する次第であります。

(會計係)

★



今度の 高山深谷

この前の「高山深谷」(第九輯)が出たのは昭和八年であつたが、それから早くも八年の歳月が流れてゐる。八年の年月は登山界ではそれ程の長年月ではないが、山の寫眞界では實にめまぐるしい程の變化があつた大きな轉換時代であつたと思ふ。第八輯迄の「高山深谷」は極度に少範圍の本會の元老達によつて寫されたいは、全くの本會のお家藝であつたが、第九輯の出た時は第八輯から已に十数年経つてゐたのでそれ迄の作者は一人も参加せず全く新しい人々の手に成つて居りその人的變化たるや實は今度の變り方以上の劇しいものであつたには相違ないが、今度には人的には元よりその内容の變

化に至ては又驚くに足るものがあると思ふ。第八輯迄の印畫數は多くて十數點であつたのが第九輯は五十點を輯録し印畫から印刷へと變化した。今度は無論印刷ではあるがその倍數の百點に増加してゐるのである。感光劑や印刷方面に於ては戦争の影響大きく、先進國からの輸入が止まつた爲に昭和十二三年頃を限度としてむしろ退歩の状態にあるが、何としても昭和十年を中心として前後五六十年間の進歩が大きかつたので前の第八輯よりは大きな進歩のある事は争へない。それよりも驚くべき事は山の寫眞家の歴史的増加であり新人の續出である。従つて山岳寫眞の多産の爲に以前はよく寫つてゐると思はれた快晴の時の寫眞などは今では殆んど珍らしい感じを受けなくなつてしまつた。今や如何に大家の手にならう共特殊な手法や天候の變化に乗じて寫された秀でた寫眞でなくては中々採用出来なくなつたのである。その爲に大家の作品も枕を並べて落選のやむなきに至つたものも相當にある。よりよきものを採録し後世永く残る立派な山岳寫眞の大畫集を作らうと努力する編輯委員の前には大家も會員も會員外もなかつたのである。只優れた作品だけが選ばれた。しかも如何に優れた作品

と雖も一人の人から五枚六枚と選ばれる餘裕はなかつた。せいゝゝ二三枚の程度である。然らばどんな寫眞が優秀な寫眞として選ばれたか。寫眞技術の最も優秀と思はれるものが選ばれたか、否。構圖や調子の優れたものに主點を置いたか、否。地域的の配分に主點を置いたか、その點は幾分考慮してあるが主點には出来なかつた。それならば變化のある珍らしい天候狀態に主點を置いたかと問はれば必ずしも然りと云へないのである。然らば何が主點かと言へば、我等が高山や深谷で感ずる山の靈氣、山の靈感或は實感をもつともよく表現した寫眞に主力を注ぐべく少なく共私は主張した積りである。これは高山深谷の生命であると私は信ずる。其他山の生活といふ點に相當に力を注がうとして努力した。かくて集まつた寫眞七百餘點の中から厳選された百葉の寫眞とその解説的隨筆、それに大家の力を打ちこんだ隨筆數篇に、本會ならではの出来得ない會員の山岳畫家數氏の筆になる香氣高き山の素描數點を飾つて初夏を期して世に問はうとしてゐるのである。期待を乞ふ次第であるが、紙飢饉の折柄會員諸氏には本會への豫約によつて入手の安全を期されたい。

(編輯委員ST記)



図書紹介

アムンゼン

山本一清著

新潮社・新傳記叢書

スコットの一行は南極からの歸還にあたり非常な行路難に遭つたが、この時オーツスは自分の體の衰弱のために行進がはかどらず、食料の缺乏して来るのを見兼ねて或る夜、決然テントを去つて吹雪の中に歩み入り行方不明になつた事件がある。またイタリヤ號航空船遭難のとき水上に不時着した一行のうちイタリヤの將校二人はスウェーデンの氣象學者マルムグレンとともにシユビツツベルゲン目指して氷原徒行を企てたが、マルムグレン博士は遭難時の負傷が増悪して歩けなくなり、頼まるまゝにイタリヤ人は博士のために氷原に墓穴を掘り一片の食糧も傍らに置かずして生き分れて歸つて來たことがある。全く北極と南極ほ

どに相反した事例で、それぞれの屬する國人の性格をも表してゐるやうに思はれる。マルムグレンはイタリヤ號上唯一の北歐人で、この前のノルゲ號の探検にも参加した學者である。アムンゼンがイタリヤ號の遭難をきいて立上つたのは主としてこの人があるためであつて、多くのイタリヤ人達に伍して彼がどんな取扱を受けたか十分に想像できただらうし、また航空船上ならばともかく、極地氷原に降り立つた場合の一行の無能力ぶりをも考へずにはゐられなかつたのであらう。かくして第一線からの引退を聲明し功成り名とげて故國に安住の地を得たかに思はれたこの偉大な人も、つひに多くの極地探検家同様に極海の藻屑と消える悲運に遭會してしまつた。探検の歴史は失敗の累積であるといはれる。アムンゼン個人に關する限り、北西航路初通過、磁北極の確定、南極到達、北氷洋航空横斷など赫々たる功績に輝き通してゐるかのやうに見えるが、しかし彼の生涯は決してトントン拍子のものではなく、失敗もあり誤解もあり攻撃もありまた經濟的の苦惱も一通りではなかつた。少年時代故國のスキー行にリングワンドンゲをやつて味つた辛き目が、後年の行爲に如何に影響したであらうか

企畫者と出資者、技術者（船長、操縦士）との人的關係はじめ、凡そ山であれ海であれ、探検の事業における明暗表裏の各相が、この人の生涯を観察することによつてうかがへる。もとよりかうした期待にそひうる傳記の執筆には探検そのものについての確たる心構へがなくてはならないが、探検に對してはともすれば驚異的態度、好奇の關心にとゞまるだけのものが多く、新傳記叢書の「アムンゼン」もまだそうした氣風に迎合しようとする傾向がぬけてゐないのは残念である。南極到達に筆を起して興味本位に記したつもりであらうが文には魅力が乏しく、材料もまた不消化の感をまぬかれない。アムンゼンに關する書物はわが國へ來朝したころ二三出たことがあるが、もはや十年以上も前のことであるし、この探検家に關心をもつ人の數も質も著しく變つたことであるから、その意味で、終りに年譜などつけてある本書は、ともかくもアムンゼンの輪廓を傳へるだけの役目はするであらう。

（加納一郎）

山の組曲

瀨名貞利著 朋文堂刊

親しい山友達の著書が世に出る

ことは嬉しいものである。その表題も示してゐるやうに、著者は山と音楽とを深く愛してゐて、もしそのどちらか一つを棄てると云はれたら、きつと困るに違ひない。この二つの世界は著者の中で、分ち難い一つのものとして融けあつてゐるやうである。

一たい世に山を愛する人々は少くない。また音楽を理解する人々も少くはないであらう。しかし、數學の確率論を持ち出すまでもなく、この二つの世界に同時に長い體驗を持ち、深い知識を有する人を見出すことは、必ずしも容易ではない。筆者にとつて何よりも得難い知己を瀨名氏の中に見出すのは、この點からであると云つて好いかも知れない。

後記によると著者は末つ子であるといふ。成ほどさう云はれて見ると、常に慈まれた環境の中で素直ほに育つて來た感情の柔らかみ、うぶで水々しいものを行文の到るところから受とるのであつた。もつとも、著者ははえぬきの江戸子だけであつて、却々口が悪いし、相當辛らつた批評もやつてゐるのであるが、それがちつとも毒つ氣や棘々しさを讀むものに與へないで、實にさらりとしてゐる。良しい珈琲をフランクで飲んだ後のやうに、ある幽かな味はひが残るばかりで、胸が焦けたり、舌が縮み上つたりする心配は少しもない。これは著者がほんとうに好い意味で洗鍊された都會人である爲かと思ふ。

著者はまた随分博識である。それが惜しげもなく、次から次へと行文の中に現はれて來る。しかもいつも餘裕綽々としてゐて、聴き手が聴きたがれば、もつと幾らでも話して貰へさうな感じがするのである。ある種のものの識りと云はれる人がよくするやうに、もつたいぶつて喰ばらひをしてから、さて御披露に及ぶといふ風な大げさな身振りがちつともない。その點が讀んでゐて非常に氣持が好いと思ふ。

巻頭の關口泰氏の序文は、それ自身既に好個の隨筆ともいふべくこの楽しい書物を一さう楽しんでくれる。装綴その他の體裁はこの書店のものとしては從來にない出来栄と云へるだらう。しかしそれも装綴者岩淵比手男氏の非常な努力によるものであつて、必ずしもこの書店の、出版文化に對する良心ある態度と認めて好いかどうか、これは我々山岳人が今後の朋文堂の實績を眺めてから決すべきものと思はれる。

それと同時に、出版文化の水準を高める上に、實際に効果あるや

うな組織なり、制度なりを確立する爲、本會の役員諸氏も、もう少しこの方面に積極的な關心を拂つて頂きたいものと思ふ。武田博士が『登山と植物』を上梓せられるに當つて、非常な迷惑をかうむられたといふやうな近い例もある。登山家は一たいに人が良過ぎはしまいか。悪い出版者には、全山岳人が團結してこれに社會的制裁を加へるぐらゐの意氣込みは欲しいものである。正義は何もエヴェレストの頂上にばかりあるとは限るまい。(勝見)

登山歩流 第十一號

昭和十六年二月東京登山歩流會發行 四六倍版一九〇頁 寫眞五葉(非賣品)

實業登山團體と稱されてゐる多くの團體の中で一頭地を抜いてゐる東京登山歩流會の報告書である手にとつて先づ感ぜられることはこの時世として中々豪華な出来であること、更にその編輯方針に細心の注意が拂はれていて、實に好感のもてる點である。

「岳」及び本誌前號の補遺であり、無雪期の一ノ倉澤及關ノ澤、積雪期の南面が手際よく纏められてゐる。私が望みたいことは、これによつて谷川岳東面もほゞ残す所なく登られた状態にあると思はるゝので、この際は非この會の人々によつて谷川東面の登山史を「山岳」誌上にでも纏めて頂きたいことである。種々な書物に分散されてゐる諸記録を一書に包含され、その利用價值は大なる可く、本邦近代登山史の重要な一齣としても亦益する所尠くないであらう。

先づ第一に、「補遺谷川岳研究」があり、これは先年發行の「谷川

し。

記録欄は昭和十三―十五年の三年間のもので、興味深く参考となるものが多い。

「種々困難な環境と餘暇の渺い中から少しでも吾々の登山領域を擴め新しい領域を求めてゆかねばならない」と云ふのがこの會の人々の涙ぐましい努力を裏附ける精神であると思ふが、益々實業團體独自の行き方に精進されんことを祈つて已まない。(望月記)

會員通信

蒙疆だより

北田 正三

拜啓二月中旬迄入蒙、胡塵をあび〇下二十三度の寒天に大と寝る去る三月五日行を起し、三月十日漸く陰山々脈中央部に入り羊羣山(二〇六四米)に登攀し多年の宿志を果し候。遙かに東に向ひ山岳會の萬歳を唱へ申し候。

春山 便り

方 炫

久しく御無沙汰致しました。四月六日二人の友と京城を發つて、雪山戀しきに北鮮の頭流山に参り

ました。四月十日登頂を終えて、唯今山麓の部落でスキーを樂んで居ります。

思つたより雪量多く、恵まれた日本春の日のシャツ一枚で荷物トランスポートのため、ザラメ雪の谷にスキーを飛ばしたり、スノーホールを造へたりして、テントも要らず思ふ存分豊かな氣の張らない「春山」の歡びを満喫致しました。

標高は二三〇八米を示してゐますが、北鮮の山としては珍らしい高さを見せて、澤は急峻で「デブリ」「硬さ」「傾斜」ともに三拍子揃つて、ちよつと骨に應えました。惠山嶺が目と鼻との間なので近く白頭山が戀しく麓までも寄つて歸る積りです。(四月十一日 成鏡北道頭流山にて)

雨の白馬

進藤 波男

三月廿日、四谷への車窓より眺めた五龍岳や八方尾根は白雪に輝いてゐたが、來て見る白馬の山稜はベツタリ霧に閉ざされ大雪溪には無氣味な雪崩れを見せてゐた。止むなく私達は梅池ヒュツテ向つた。途中蜿蜒長蛇の名古屋山岳聯盟の縦列に會ひ、小雨に交へて烈風になり始めた日暮れ、小屋に着いた。翌日四時起床薄明り

の天狗原へかゝると猛烈に吹雪いて來て乗鞍を越す項、飛ばされる程強くなる、それでも心臓強くカメラをひねり廻し、あはよく高山深谷寫眞募集に出さうなどと大それた野心で來たものの後で現像した結果、はからずも軟調寫眞が出来上つて、レンズをよく拭かなかつた事を忠實に告白して呉れた。

翌日も憂鬱な雨に中途より引返し、生木造りの小屋の屋根からバケツに落ちる雨だれシンホニーを淋しく聞きながら日が暮れる。

翌日は小雪に明けたが又雨に變り、あはて「クリスマス」をスキーに塗る、白馬頂上は今日も見込なく、大糸北線小瀧へ長距離滑降も水雪では時間が危く、矛を轉じ神の田圃から林間の下山は重いザツクの安定を平凡な我がテクニクは保證せず、軟雪中に数多くの轉倒穴を残す、而し林を出てからはザラメのスロープでブンブン三人はすつ飛ばした。落倉原スキー小屋邊に來ると、白く深いガスが巻いて來て、十米程前に行くハ一さんの姿が、思ひ出せぬ忘却の内の人の様に、にじんで行つて續く私も、次の友の姿も音もなく解け込んで行つてしまつた。



會務報告

三月役員總會報告

三月二十五日（火）午後六時半
於虎ノ門事務所

出席者 高頭、武田、島山、横、
茨木、西堀、沼井、三田、中司
早川、福島、逸見、塚本、吉澤
青木、山口、交野、望月
委任十一名

（議長 横副會長）

- 一、本會の現状に就いて
現在會員數、來室者數、會費入金狀況等に付塚本幹事より説明
- 一、武田顧問より岳聯加盟方法に關して質問あり
- 黒田監事起草の原稿を再検討する事とし三月號の會報發表は取止めとす。
- 尙此問題は近々役員總會を開き練り直す事とす。
- 一、定款細則作製の件
- 加藤、中司、沼井の三氏に一任
- 一、昭和十七年度山日記編輯の件
- 吉澤、早川、山口三氏に一任。
- 一、新年度事業及豫算案の件

次回に審議す。

一、幹事集合の件

役員會前等に幹事のみ集合する事は中止。各事務擔當者が小委員會を開く事とす。

一、關西支部經費の件

次回に審議す。

一、會員總會開催の件

四月下旬頃開催のこと、講演會を併せ開くこと。

一、主事の件

置くことを原則とす。

一、山岳、會報の編輯報告あり。

一、會報合本定價の件

一部金五圓、送料三十三錢。

一、圖書整理の件

目錄作成準備のこと。尙圖書購入については投書箱を作り會員の希望を聞くこととす。

一、高山深谷刊行の件

目下寫眞募集中。

一、入會申込者銓衡、左の通り承認決定さる。

入江保太、木村宗成、若尾欣秀

幸川正彌、大洞一、山本雄一

郎、眞鍋健一、

四月役員總會報告

四月八日（火）午後六時半 於

虎ノ門事務所

出席者 高頭、武田、冠、島山、

木村、横、沼井、額田、加藤、

角田、茨木、中司、早川、青木

村尾、金山、横山、逸見、塚本

委任十六名

一、新年祝事業と豫算案の件

塚本幹事を基礎に島山理事豫算案を作成し、その説明あり。右を會員總會にかけること決定、新事業はその都度役員會に

かけて決することとす。

關西支部の經費は昨年通り八五〇圓とし、事業を行ふ時は支部

の事業とせず本會の事業として

要請せられたきこと。現在の關

西支部會員數の二倍以上に至急

會員數の増加を圖られたき事。

法人改組後の本會事務を引續き

塚本幹事に委嘱することとす、

但し舊日本山岳會の事務委嘱は

一應解任の形をとる事とす。

一、會員の岳聯加盟方法に就いて

日本山岳會は岳聯に對し滿腔の

支持をする事

日本山岳會員は機構上一團とし

て加入出來す

從而會員は次の何れかの方法に

より加入する事

一、職場その他の地域團體を通

じて加入する事。

二、府縣毎に會員の團體を組織

してそれを通じて入る事

一、谷川岳避難小屋の件

小屋は雪溶けを待つて着工する

事になり既に入札済の旨角田評

議員より報告ありたり（會報前

號参照のこと）

一、事務所圖書室開室時間變更

四月九日より左の通りとす

毎日正午開室

月水金——午後八時迄

火木土——午後五時迄

日曜祭日閉室

一、入會申込者左記の通り承認

磯野三郎、日江井正巳、岩崎利

一、大塚武、石原信恕、荻野俊

男、藤見勝、松野節夫

常務役員會報告

四月十五日（火）午後七時 於

虎ノ門事務所

出席者 島山、沼井、中司、吉澤

早川、望月、村尾、交野、金山

山口、塚本

委任二名

（議長 島山理事）

一、本年度行ふべき事業大綱作成

の件

右に就き塚本幹事より緊急開き

たる本會合の趣旨説明あり。四

月の役員總會を終りて尙本年度

行ふべき事業大綱の決定なきを

遺憾とし、速かに決定せられた

き必要を要請、事務所に集りた

る次の如き新事業案を提出して

審議に入り左の通り決定。

イ、登山年譜（日本登山史）の

作成

昨年来懸案の本年譜作成を、

當面の本會主要事業とすること

に決定、木暮會長を委員長

とし最近に具體的研究に入る

ロ、圖書の刊行

一、登山技術に關するもの

二、山と戦争

三、高山深谷第十輯

ハ、高山深谷刊行記念山岳寫眞

展覽會七月開催すること。

ニ、日本山岳會法人改組記念講

演並に映畫會

六月下旬開催のこと。

ホ、山岳講演映畫會

十一月下旬開催のこと。

ヘ、獎勵金の交付

山に關する優れた研究發表、

研究的登山其の他登山界に寄

與ありたる行爲に對し、日本

山岳會賞とも稱すべき獎勵金

を交付すること。右は年度末

の役員總會に於て其年度中の

ものより選ぶこととす。

ト、講習會

關西側よりこの點に關し申告

あるものと思はれるに付この

問題は保留。

チ、所藏圖書充實整理の件

圖書の整理、圖書目錄、圖書

原簿の作成及び圖書の充實を

期し、山岳圖書館としての完

成を期す。

リ、天幕及び各種の登山用具の

比較調査。

右調査開始することとす。

ヌ、雪洞の研究

最近雪洞流行の爲打棄て置けざるものとし、研究、結論をつけんことを期す。

尙新事業のうち相當の經費を要するものは収入の狀態と照合し會計の安全を期して行ふものとす。

一、會員總會 五月十五日(木)

三會堂に開催に決定。

會員總會後の講演會講師は早大冠帽峰遠征隊を依頼すること。

一、講演會 毎年六月及十一月の二回行ふこととす。

一、小集會 東京に於ては毎年九月及二月の二回行ふこととす。

一、高山深谷編輯委員の決定。

鳥山、塚本(閑)、塚本(繁)、早川、藤島、青木、横山、逸見、山口、織内の十氏に依頼することとす。

會員章再交附

一八九八番 本多利耳(姫路市)舊番號一五四三番は無効とす。

會員改名通知

法貴六右衛門兵庫縣(舊名六衛)大澤伊三郎 甲府市(舊名照貞)

受贈會報部雜誌

頂山岳會 頂三卷十號
築地山岳會 堆石三月號
日本アルカウ會 アルカウ趣味二十八三年號
東京峰友グルツペ 踏跡四號
法工山岳會 ぼこう六卷一號
東京地學協會 地學雜誌三月號
横濱山岳會 會報三月號
沖電氣山岳部 部報三月號
熊本アルカウ會 會報三月號
雁ハイキンググループ 雁三月號
東京高嶺會 高嶺四月號
横濱高工山岳部 部報第三號
日本厚生協會 厚生の日本四月號
東京瓦斯山岳會 會報三十七輯
東京山ノ會 會報四月號
聖山岳會 聖二號
東京アルカウ會 アルカウ四月號
朋文堂 山小屋四月號
廣島山岳會 會報四月號
日本アルカウ會 アルカウ趣味四月號
東鐵やまをとこの會 會報二八號
明峰山岳會 MMC十年四號
俣松山岳會 會報四月號
昭和山岳會 會報四月號
大阪探險俱樂部 白峰四月號
横濱山岳會 會報四月號
東京雪嶺會 雪嶺三十號
東京登歩溪流會 會報四月號

武藏山岳會 登山四月號

日本旅行協會 ツーリスト四月號

綠山會 健脚春季號

津峠の會 峠四月號

登山とスキー社 登山とスキー四月號

東京市山岳部 部報四月號

台灣山岳會 彙報四月號

東京質屋山岳部 部報四月號

築地山岳會 堆石四月號

阪神山岳會 山幸八四號

七十七銀行山の會 泉ヶ嶽十四號

The Mountaineer, March, 1941.

Trail and Timberline, March, 1941

The Geographical Journal

January, 1941.

De Bergids, Mar-April, 1941.

Die Alpen, Marz, 1941

Horolezec cislo 1, 1940.

著書寄贈

A・H・コライン著

ニニギニア最高峰カルステンツ

安江安宣譯 右安江安宣氏

昭和十六年五月二十六日 印刷納本

昭和十六年五月三十一日 發行

頒價 二〇錢

日本山岳會内

編輯者 塚本 繁 松

發行者 東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)

發行所 社団法人日本山岳會

電話芝(四三)一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地

印刷者 植田 庄 助

印刷所 成文堂印刷所

舊日本山岳會昭和16年度(12月)歳入歳出決算

(昭和16年3月1日社團法人へ引渡=付決算)

歳入の部

會費及入會金	1,590.50
入會金	80.00
會費	1,510.50
通常會員會費	1,350.50
終身會員會費	160.00
雜收入	29.91
印刷物賣却代	15.75
廣告料	5.00
雜收入	9.16
假受金	475.96
繰越金※	2,485.94
合計	4,582.31

歳出の部

事務費	412.77
借室料(關西)	82.21
消耗品費	104.08
旅費	20.89
電話費	21.24
人件費	104.00
本部	80.00
關西	24.00
雜費	80.35
事業費	617.35
出版費	170.41
研究調査費	54.90
集會費	27.45
通信運搬費	88.18
臨時費(山岳聯盟結成費)	276.41
假受金支拂	600.00
差引剩餘金(社團法人へ引渡)	2,952.19
合計	4,582.31

(※昭和15年末剩餘金ハ¥2,759.11ナレ共内基金)
益金¥273.17ハ基金元本ニ組入レタリ

昭和15年度(3月)歳入歳出決算

歳入の部

會費及入會金	1,831.00
入會金	80.00
會費	1,751.00
通常會員會費	1,411.00
終身會員會費	340.00
雜收入	67.30
印刷物賣却代	23.80
圖書基金	5.00
廣告料	15.00
雜收入	18.50
假受金	89.50
舊月本山岳會ヨリ引繼金	2,952.19
歳入合計	4,939.99

歳出の部

事務費	676.02
借室料(關西)	42.40
人件費	52.00
電話費	0.45
旅費	2.67
消耗品費	125.48
備品費	178.00
雜費	275.02
事業費	1,410.76
山岳印刷費(35年2號)	875.48
山岳原稿謝禮	60.00
會報印刷費	181.10
研究調査費	8.70
通信運搬費	157.93
本部	156.29
支部	1.64
集會費	127.55
假受金支拂	480.00
合計	2,566.78
差引剩餘金	2,373.21
(昭和16年度へ繰越)	
歳出合計	4,939.99

麻防水布製

キスリング型(E式)

ルックサック

★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

特大 二尺二寸 二七・五〇

大型 二尺 二五・三〇

中型 一尺八寸 二三・一〇

小型 一尺六寸五 二〇・九〇

◆ハイキング用肩掛バッグ 三・七〇

◆門田製シユタイクアイゼン在庫品豊富

◆テルモス各種・ハイキング用品
(公定價格九・五〇)

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一八四番